【水の作文大賞】

私達が守る命の源

熊本大学教育学部附属中学校　二年　廣岡　里奈

火星には、水の流れた跡がある。内部には北海道四個分の氷があると言われている。未来の地球に人間が住めなくなると予測した研究者達は、第二の地球として火星に注目している。他の惑星ではなく火星が選ばれたのは、全ての命の源である「水」の存在が確認されたからだ。「水は命の源」私にもそれを強く感じさせた、まだ新しい記憶がある。

私の住んでいる熊本県では、平成二十八年四月に熊本地震が起きた。熊本県は多くの被害を受け、私も被災者になった。蛇口をひねっても水が出てこない。私の家も何日も断水した。普段あまりにも当たり前に身近にある水がない。洗濯、トイレ、お風呂そして飲食も満足にできないという状況に、非常に不安になり、命の危険を感じた。水を求めて、私達は近くの店を回ったが、既にどこも水はなかった。二時間以上並んだ給水車でも水は手に入らなかった。

家の中のあらゆる水がなくなった頃、知り合いの農家の方に、湧水を分けて頂ける事になった。熊本市中心部からそう遠くない、普段なら流れていても目につかない水路の脇。そこから、一点の濁りもない透き通った水がこんこんと湧き出ている。太陽の光を浴びて、きらきらと輝くその水を見ると、それまでの緊張も不安も自然と消えていった。嬉しさが心から込み上げてくる。私達はペットボトルに入るだけの水を汲ませて頂いた。春の温かい陽気の中で、その水に手をつけてみると、ひんやりと冷たく心地良い。飲んでみると甘い味がした。地震の後久しぶりに、私はとても安心する事ができた。震災以前から、近所の方はその湧水を使用されていたそうだ。

家に持ち帰った水を、私達は工夫して使った。コップ一杯の水で手を洗ったり、タオルを濡らして顔を拭いたり。電気が復旧してからは、電気ポットとやかんに水を入れて沸かし少しずつ湯船にためて、浅いお風呂に交代で入った。残り湯は、トイレを流す事に使用した。しかし、どんなに工夫して使っても頂いた水には限りがあり、不安な状況が続いた。

翌日、前の家のおじいちゃんが「電気がきて井戸水が汲めるようになったけん、自由に使ってよかですよ。」と声をかけてくださった。初めて飲んだ井戸水は、普段飲んでいる水道水よりもおいしく感じた。水を分けてくれる周りの方々がいたから、断水を無事乗り越える事ができた。

熊本地震で、私は水の大切さを身に染みて感じ、本気の節水を経験した。それまで口では「節水しよう」などと言いながらも、どこか他人事だった。節水は本気になれば誰でもできる。やるかやらないかだ。私は自分ができる小さな節水から、意識して取り組むようになった。また、私達を助けてくれた、湧水や井戸水を育む環境の重要性を感じた。

被災者を救ったのは井戸水と言われている。そしてその井戸水や湧水を生活に使用できたのは、豊かな水を育てる環境があったからだ。どこの湧水でも飲めるわけではない。熊本の水がもし水質汚染されており、水量が少なければ、たくさんの被災者を助けられなかった。

熊本には水を育てる環境がある。森林は雨水を根や土で長い年月をかけて、ろ過してくれる。水田は水を蓄えてくれる。そうしてできた水は、ミネラルが豊富で、私達の誇りだ。

私達人間は水がないと生きられない。他の生物も同じだ。地球の源は水なのだ。

正直、火星の研究には今は興味がない。まずは自分にできる事を少しでも実行して、この熊本の、この地球の環境を守ろうとする気持ちが大切だと思う。一人一人が小さな節水を心がけ、未来にも同じ環境を残すべきだ。

あの美しい湧水、おいしい井戸水、人の温かさ、誰もが安心できる未来。百年後も同じ水を飲める環境が、全ての生命に幸福をもたらすと信じている。